

お正月ですう。

「やった一、世界はもうそろそろ無事に世紀末を越え、新たなる新世紀の幕開けを歓迎することができたわけ。きっと元旦にはみんな新世紀おめでとうございますと言ったに違いないです。そして21世紀から20世紀を振り返る時、人は20世紀のことを前世紀、と呼ぶ、のかなあ…」

「なんか古そうな世紀だなあ。だいたい20世紀には、19世紀のことはやはり19世紀であって前世紀と呼んではいけないよ。それよりも気になるのが新たなる新世紀、なぜに新が二度も重ねてある？」

「なーんだ、それはそれでいいとして、白髪白き翁或りて、とか古文にもあったよね。そんなわけです、つつい私も重ねてみたいなあ、なんて」

「なんで？ ま、二重尊敬とかあったからね、でもそれは天子に対してだし、だいたい白髪白き翁って単に描写が変なだけ。でもま、目出度いからいっか、お正月だし」

「白髪が目出度の？ ジャ若白髪も？」

「友白髪とかいって長寿長命長生きのシンボルは、白髪」

「あと、鶴とか亀とかね？ つるかめつるかめって言うし」

「確かに、お正月にふさわしい軸と言え、朝日だとか富士山だとか、鶴亀だとか、しゃれこうべだとか」

「一休さんね、でも、やっぱ骸骨はあんまりお正月じゃないな、ちなみに頭蓋骨をずがいこつって読まないでとうがいこつって読むとなんかかっこいい響き…」

「そりゃ個人の自由だけど、それを言うならお正月はどう目出度いんだろう？ それにだいたい、なぜ年の初めをこの冬の寒い時期にもってきたなんて…」

「答えわかっているくせに」

「そりゃ、冬至で年で一番太陽の出ていない日の次くらいとなると、もうこれは太陽の再世、新たなる命の息吹を否がおうにも感じてしまう。なんか年の初めにするのを否定できない厳粛な空気を認められなくもない」

「つまりは北半球産の暦だとうなるってわけ」

「南半球ではもう少し文明の発展が遅れたおかげでなにごとにも北半球中心の地球文明でこの世は成り立っているものの、この新世紀は宇宙開発よりも海洋開発の方が資源を手っ取り早く得られそうだし、きっと海洋の多い南半球に多くの人が集まるだろうね」

「人口も爆発したから、きっとみんなそっちに行って遺伝子操作でえら呼吸するようになって海底

人の時代が訪れるの！」

「遺伝子かあ、古来から血の選別はされてきたから、それくらい自分の子孫に対するお土産のつもりする人々はたくさん出てくるだろうね」

「お土産なの？」

「そう、ここまで我々は頑張りましたよって意味で、それこそあつと言う間に広まると思う」

「そう言えば省エネ人類の開発も研究されているんでしょ？」

「そう、現行の人類よりもひと回りふた回り小ぶりでエネルギー消費の少ない人類にみんなして遺伝子操作するって計画だったか提言だったかがあった。でもそれってある意味後退するようなイメージがあると思う」

「ま、軽薄短小が世の流れとは言え、人までそうするのはちょっとねえ」

「じゃ早いとこ火星にでも移住するとか？」

「なんか寒そう。それに先住民が居そう」

「変なこと心配するねえ」

「きっと火星みたいな火星人が居るの」

「じゃあ、インフルエンザで滅亡だな」

「がーん。でもそれは来襲してきた火星人があって、逆に地球人が来襲するんだよ、きっと火星型インフルエンザでこっちが滅亡だと思う」

「確かに、それならそれで話が合う」

「えっへん、そういうわけで人類はまだまだ地べたに這いつくばって生きていくのです。そもそも新世紀の割には目出度さ半分、悲しさ半分」

「なにが悲しさ？ 冥土の旅の一里塚だから？」

「違う、きっと、もうこんな珍しい年末はないだろうから、もう少し長く堪能していたかった」

「新世紀の正月を堪能すればいいのでは？」

「お正月は妙に詰まんない、人がなんかよそよそしい、変に気取っている気持ちを自分がいだくのも許せない」

「普通、それは新年で気分一新、清々しい心持ちになっていることだと思うんだけどなあ」

「それは建前、きつともっと深いところでみんななんで新年なんだろう？ なんで新世紀なんだろうって思っている。だいたい、七草粥を食べる頃、すべてが終わった祭りの後の寂寥感を感じない？ あたしはだいたい感じる、どうせならお芋の入ったお粥さんの方が食べたいって思うもん！」

「そりゃ休みが終わるからじゃあ…」

「ああ、新世紀末、早くこないかな」

「1年までば新世紀初の年末だよ…」

「なるほど！ それはそれできつと盛り上がる！ よかった一年がんばろお」

「なんだか…」

おしまい